インドネシア共和国　　派遣期間 2014 年４月～2017 年３月

ジャカルタ日本人学校　実践報告

ニセコ町立ニセコ小学校
教諭　本多　摩紀

１．インドネシア共和国について

インドネシア共和国（通称インドネシア）は，東南アジア南部に位置する共和制国家で，首都はジャワ島に位置するジャカルタである。

国土は 5,110km と東西に非常に長く，また世界最多の島嶼を抱える国である。赤道にまたがる 13,466 もの大小の島により構成される。

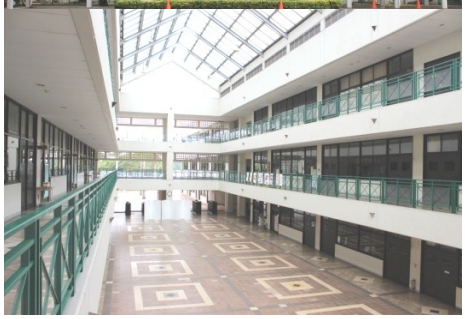
人口は２億 3,000 万人を超える世界第４位の規模であり，また世界最大のイスラム人口国としても知られている。

憲法 29 条で信教の自由を保障している。パンチャシラでは唯一神への信仰を第一原則としているものの，これはイスラム教を国教としているという意味ではない。多民族国家であるため，言語と同様，宗教にも地理的な分布が存在する。バリ島ではヒンドゥー教が，スラウェシ島北部ではキリスト教（カトリック）が，東部諸島およびニューギニア島西部ではキリスト教（プロテスタント，その他）が優位にある。2010 年の政府統計によると，イスラム教が 87.2%，プロテスタントが 7%，カトリックが 2.9%，，ヒンドゥー教が 1.6%，仏教が 0.72%，儒教が 0.05%，その他が 0.5%となっている

公用語はインドネシア語。インドネシアは，1,128 の民族集団，745 の言語（2010 国勢調査）があると言われており，インドネシア語は，スマトラ中南部の海洋交易語であるムラユ語をベースとして作られた言語である。

インドネシアの首都ジャカルタは，経済発展が著しく，高層ビルが次々と建設され，各種ショッピングモールは，大勢の買い物客でにぎわっている。一方で，ＭＲＴ（都市高速交通）の開通に向けて工事が進んでいるものの，整備が追いつかず，渋滞が社会問題になっている。

２．ジャカルタ日本人学校について



ジャカルタ日本人学校（JJS）は，インドネシアの首都ジャカルタの郊外にある。1996 年３月までは，ジャカルタ市内のパサールミングというところに学校があったが，校舎の老朽化と児童生徒数の増加に伴い，1996 年４月に，現在のビンタロ地区に移転をした。

敷地面積 79,192㎡，３階建て校舎３棟，小学部・中学部ごとに運動場，体育館，プール，コンピューター室がそれぞれにある。また全教室・特別教室・中学部体育館に冷房が完備されていて，快適な学校生活を送っている。

学習内容は日本の小中学校と同じ教科の他，「英会話の時間」が設定されている。小学部１年生から学習が始まり，小学部４年生以上は週２時間学習をしている。「総合的な学習の時間」や「生活科」では，インドネシアのことを理解するために自分たちで様々なことを調べたり，現地の学校と交流活動をしたりしている。また，熱帯にある学校なので，小学部で「水泳」は，年間を通して行うことができ，泳ぎ

の大好きな児童生徒がたくさんいる。

JJS には，体育祭，JJS フェスティバル，合唱コンクール，学習発表会，校外学習，遠足，宿泊学習，修学旅行など，たくさんの行事があるが，ジャカルタのことインドネシアのことを学ぶことを大切にしている。行事を通じて，インドネシアの児童生徒と交流することもそのひとつで，インドネシア語や文化を学ぶことができる。中学生が参加する，日本インドネシア友好親善スクールは，20 年以上の伝統をもつ行事である。その他，部活動の親善試合，ヘリテイジ（インドネシア理解）などの活動もある。

児童・生徒のほとんどは，約 70 台のスクールバスで通学している。ジャカルタは熱帯にあることや交通渋滞がひどいことから，朝早いうちに登校し，7 時 30 分から始まる朝の活動に備える。給食はなく，全員がお弁当と水筒を持参してくる。また，朝早く家を出るため，お腹の空いた児童生徒のために，２時間目と３時間目の間の休み時間には中間食を食べてもよいことになっており，売店にパンやおにぎりが売られている。

３．現地理解教育の実践事例

ジャカルタ日本人学校では，教育目標の一つとして『世界に心をひらく子』を標榜している。これは，日本を離れ，インドネシアで生きる日本人として，インドネシア文化理解を通し，グローバルに物事を考えることのできる児童・生徒の育成を目標としたものである。

そのための取組内容として，①総合的な学習の充実②現地校及びインドネシア文化との交流の推進，③日本の伝統的な文化な文化に触れる，④インドネシアの高校生・大学生との交流の４点を掲げている。この取組内容に準じて教員が一体となって現地理解教育を推進している。

この中でも，私が特に力を入れて取り組んだ「現地理解教育」についての具体的実践の事例を示していく。

（１）校外学習を通じた現地理解教育

本校では，小学部第１学年から中学部第３学年までのすべての学年において，その発達段階に応じた校外学習を行っている。校外学習では，社会科だけでなく，生活科，総合的な学習の時間など，その教科・時間のねらいに即した学習活動が実践されている。ここでは，担当した小学部３年と６年の社会科及び総合的な学習の時間の実践を示していく。

〇小学部３年の取組

①ラグナン動物園見学（総合的な学習の時間）

「インドネシアの生き物博士になろう」をテーマに総合的な学習の時間を行っている３年生は，ジャカルタ市内にある「ラグナン動物園」に行き，インドネシアに住む動物の見学をする。コモドドラゴンやバビルサなど珍しい動物を見学することができ，インドネシア特有の生き物についての理解を深めることができる。

②学校周りたんけん（社会科）

日本でも行われている学校周りたんけん。安全面に十分配慮（セキュリティーや保護者のボランティアを配置）しながら実施する。ジャカルタの生活では，普段外をあることは難しく，アパート内での生活を強いられている子が多い。移動も自家用車が多いため，外を歩くことはほとんどない。そのため，

現地の人の生活の様子を生で見ることができる学校周りたんけんは大変貴重な機会となっている。日本ではなかなか見ることのできないモスク，カキリマ（移動式屋台）や様々な宗教のお墓などを見ることができる。また，歩いてみる中で，日本企業のもの（ＳＯＮＹ，Panasonic などの電化製品，TOYOTA，YAMAHA などの自動車やバイク）が多いことや，道が舗装されていないところが多い，横断歩道がほとんどないなど，日本の生活との違いに気付くことができる。

③ヤクルト工場見学（社会科）

学校からバスで２時間半離れたところにあるスカブミという地域にあるヤクルト工場の見学をする。この地域は水がきれいなこともあり，近くにポカリスウェットの工場や現地のミネラルウォータの会社も数多くある。日本でも行われる工場見学ではあるが，現地ならではの苦労や工夫を聞くことができる。

④日本食スーパー見学（社会科）

日本企業が多く進出しているインドネシアだが，日本食を多く扱うスーパーは少ない。「パパイヤ」という日本食スーパーを見学し，スーパーの工夫やスーパーで働く人の工夫を学ぶとともに，現地ならではの苦労や工夫も学ぶ。昨年度から，児童数の増加に伴い，スーパーでの見学が難しくなったこともあり，イオンでの学習に変わっている。

〇小学部６年の取組

①タマンミニ見学（総合的な学習の時間）

民族理解を深めるため，インドネシアの各島の文化を学ぶために「タマンミニインドネシアインダー」という施設を見学する。「タマン」は公園という意味のインドネシア語である。ここは，インドネシアを一つの敷地に凝縮したような施設で，多民族国家らしいパビリオンが数多く点在している。特に，各島のパビリオンでは実寸大の家や，伝統的な衣装などが展示されており，現地の生活の様子を感じることができる。

②モナス見学（総合的な学習の時間）

「モナス」（インドネシア語: Tugu Monas　トゥグ・モナス）とは，ジャカルタの中央ジャカルタ地区にある公園「ムルデカ広場」の中心部にある国家独立記念

塔の名称で，Monumen Nasional （英語でNational Monument)」を略した造語である。エレベーターが設置され，最上部は展望台になっており，ジャカルタ市内を見渡すことが出来る。また底部は歴史博物館になっている。児童は主に歴史博物館を見学する。インドネシアの国の始まりから現在に至るまでがジオラマで展示されている。インドネシア語と英語で解説がされているため，児童は事前にインドネシア語の先生方が訳してくれた日本語を参考にしながら見学する。

また，独立宣言をした際の肉声も聞くこともでき，児童はインドネシアの歴史を目と耳と肌で感じることができる。

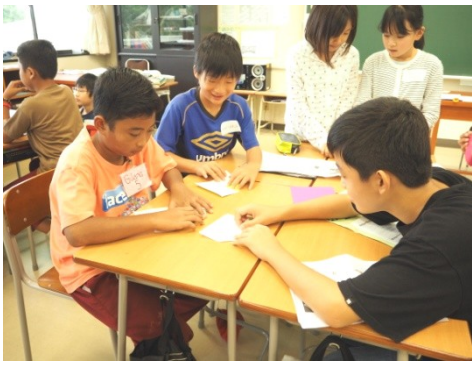
以上，第３・６学年の例を示したが，単に教科としての見学にとどまらず，「現地理解」も同時に行えるような工夫をして行っていた。これは他の学年の校外学習においても同様であり，全体として現地理解教育につがなるものとなっている。

（２）現地校交流を通じての現地理解教育

ジャカルタ日本人学校では，全９学年において，現地校との交流活動を通して，現地理解教育を行っている。小学部第６学年では，近郊にある公立の「プリギ校」と交流を行った。昨年度から交流をはじめた学校ではあるが，日本の学校への興味関心がとても高く，意欲的な交流となっている。ここでは小学部第６学年の実践を示していく。

①プリギ校との交流（招待）

２学期は，プリギ校の児童を本校に招待しての交流を行った。各クラスが日本らしい遊びや文化（折り紙，書道，相撲など）を紹介し，一緒に遊んだ。また，それぞれの国のよさや課題を日本語とインドネシア語で伝え合った。また，これから両国がどのようにかかわっていけるかを話した。プリギ校の児童も日本語を覚えてきてくれたことに子どもたちは大きな喜びを感じていた。



②プリギ校との交流（訪問）

３学期は，プリギ校を訪問した。学校に着くと，６年生以外の児童も本校児童が来るのを楽しみに待っていたようで，全員で出迎えてくれた。各クラスでインドネシアの遊びを教えてもらった。本学級では，「Karet（カレット）」というゴム跳びのような遊び，「Congklak（チョンクラック）」という貝を使った遊び，「Bekel（ベクル）」というスーパーボールを使った遊びを教えてもらった。また，インドネシア語や日本語を使って伝言ゲームをしたり，ジェスチャーゲームをしたりした。

以上のような交流が，全学年において，それぞれの発達段階に応じて行われている。交流の機会を本校が意図的・計画的に設定することで，それに向けて，児童・生徒にとって必然性をもった言語学習や現地理解学習が，継続的に実践され続けているのである。

（３）現地人材を生かした現地理解教育

①昆虫レクチャー

小学部第３学年では，理科で昆虫の学習を終えた後，現地で活躍する昆虫に詳しい吉川先生を招いて「昆虫レクチャー」を行っている。コノハムシやナナフシなど，普段はなかなか見られない昆虫を連れて来てくれ，実際に触ったり，観察したりすることができる。また，子どもたちが知りたい昆虫の疑問について詳しく教えて下さる。

②学習発表会（サマンダンス講師）

小学部第６学年では，「サマンダンス」を現地の講師イドゥリフ先生に教えていただいた。サマンダンスとは，１３世紀に，アチェ州のガヨ・ルエス地方のウラマー（イスラム指導者），シェク・サマン師によって編み出された踊りである。伝統衣装を着た若い男性や少年が，膝をついて座ったまま列に並び，歌やリズムに合わせて手，指，腕，頭，上半身を上下左右に一斉に素早く力強く動かし，肩や手をたたく。踊りには宗教的なメッセージが込められているとされ，村の祝い事や村同士の交流イベントで披露されてきた。一斉に手が動く様子から「千の手のダンス」と呼ばれることもある。サマンダンスは前述したように，通常は伴奏せず，ダンサーが歓声をあげながら，手を胸と膝に交互に拍手を打ち，

さまざまな方向に一斉に向いたりする。この踊りをマスターするにはSYECH（シェク）という指導者がガイドし，高濃度の運動を要する。

イドゥリフ先生を講師に迎え，学校で３度の練習を行った。また，その練習の成果は学習発表会で発表する。イドゥリフ先生はSYECHとして当日も学校に足を運んで下さり，子どもたちと息の合ったサマンダンスの発表を行った。サマンダンスの体験を通して，現地の理解をさらに深めることができた。

このように，学習発表会では，現地理解教育の学習の成果を発表する学年も多い。例えば，小学部第３学年では，インドネシアの生き物を調べ，分かったことや考えたことを劇にして発表した。また，第５学年では，インドネシアの環境問題について学習したことを発表した。インドネシア語の先生の協力も得ながら，現地人材も活用して現地理解教育を進めている。

４．ジャカルタでの生活を支えてくれた人

（１）ソピルさん

ジャカルタでは，歩道は整備されているところが少なく，基本的に外を歩くことはない。ワゴン車のような小さいバス（コパジャ）や，電車などもあるが，乗ることは安全面からあまりよいとされていなかったため，自家用車での移動になる。しかし，その自家用車，自分で運転できるかというとそうではなく，ソピル（運転手）さんにお願いしなくてはならない。朝の通勤，帰りの退勤までの間は，学校で待機してくれている。「待つのが仕事」とまで言われる仕事だが，私たちのインドネシア語の先生にもなってくれていた。インドネシア人で一番長く一緒にいるのは運転手。運転の邪魔にならない程度にお話しする中で，日常で使うインドネシア語と覚えていくことができた。ベテランのソピルさんは道もよく知っていて渋滞の多いジャカルタでも，私たちが少しでも目的に着くよう頑張ってくれていた。ソピルさんなしでは私たちの生活は成り立たないのである。

（２）メイドさん

ＪＪＳでは，メイドさんを雇うことが推奨さていたため，私もメイドさんを雇うことにした。出勤日の生活は，朝５時に起き，家を６時に出る。帰りは渋滞がひどく，帰宅は２０時を過ぎることが多かったので，自分で洗濯や掃除，お弁当の準備をするのも大変だったこともあり，はじめは抵抗もあったが，とても助けられた。アパートの設備のトラブルなども，私より先に気付いて直しておいてくれることもあり，一人暮らしには欠かせない存在だった。長くＪＪＳの教員のもと働いてくれていたメイドさんだったので，日本食も上手であり，アパート内のメイドさん同士で料理を教え合っていたようで，いつも同じような食材しか買ってこなくても，新メニューが出ることもあった。初めは言葉が通じず，意思疎通ができなく大変な時もあったが，まるで母のような存在にとても助けられた。

（３）カリヤワンさん

ＪＪＳには大変優秀なスタッフがいた。「カリヤワン」と呼ばれる人たちで，日本で言うと公務補さんのような方々である。朝早くから学校の掃除，壊れたところ修理・修繕，行事のときは会場作り，体育祭の時はライン引き，コピーや製本，パソコンのトラブル解消など，ありとあらゆることを手伝ってくれる。JJS では，清掃活動も週に１度だけだったので，放課後カリヤワンさんが丁寧に行ってくれていた。カリヤワンさんのおかげで，仕事に力を注ぐことができた。カリヤワンさんなしでは JJS での勤務はできなかったといっても過言ではない。

（４）素晴らしい同僚の仲間たち

日本人学校には全校各地から先生方が集まってくる。そのため，それまで知らなかった他地域での教育や指導法についてたくさん学ぶことができた。初めはやり方の違いに戸惑うこともあったが，今まで知らなかったたくさんの指導法を学ぶことができた。日本にいたときのように，研修会などはないのでＪＪＳでは，「自主研修」を行っていた。各先生方の得意なことで講座を開き，研修も行った。多彩な先生方に巡り会えたことで，教員としての幅を広げることができた気がしている。

（５）インドネシアのみなさん

インドネシア語には「Tidak apa apa（ティダ アパ アパ）」という言葉がある。「問題ないよ！」という意味の言葉で，本当によく使う・使われる言葉だ。日本のようにスムーズに物事が進むことも多々あったが，そんなときは「Tidak apa apa!」でいろんなことが許されてしまう。とっても便利な言葉だ。インドネシア人の寛容さに何度も救われた気がする。この言葉のおかげで，細かいことは気にしなくても生きていけるのだと気付かされた。「郷に入れば郷に従え」ジャカルタの人から，新たな生き方を教えてもらった派遣生活であった。